荒神山古墳

彦根市日夏町ほか

荒神山古墳遠景

湖東湖岸部に位置する独立丘陵である荒神山。その山頂から琵琶湖側に少し下った地点に荒神山古墳は築造されている。全長124m、３段に構築され、埴輪と葺石を備える堂々たる前方後円墳である。そして、その墳丘は湖東の平野部からは確認しにくいが、琵琶湖からは容易に確認できると言う特徴を持っている。

琵琶湖の周辺では、100mを超える規模の前方後円墳は３基存在する。まずは安土瓢箪山古墳、膳所茶臼山古墳、そして、荒神山古墳である。これら３基の古墳は４世紀後半頃に順次築造されたもので、いずれも琵琶湖を意識した立地条件で、前後の時代との系譜関係性の乏しい場所に突然構築されることで共通する。

古墳時代前期後半、琵琶湖を統べる３代にわたる王が君臨していたのである。

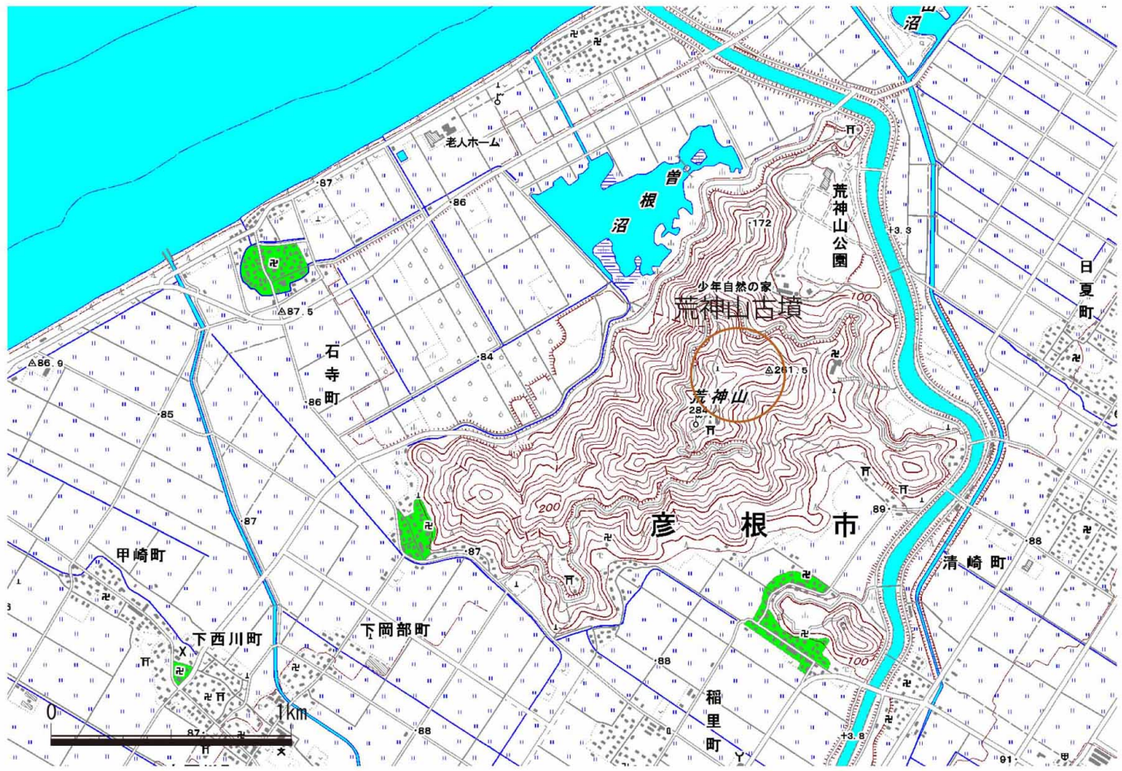
周辺のみどころ

荒神山の中腹には、多数の後期古墳が営まれている。その内、幾つかは横穴式石室に入ることも可能である。やや奥行きが短く、ドーム状に構築された横穴式石室は渡来系氏族との関係も想定されている。また、現在は跡形もないが、荒神山の南の平野部には、かつてゲホウ山古墳が存在し、埴輪が出土している。

普光寺集落の外れにある広浜神社には大きな塔心礎が残されており、一見の価値がある。普光寺廃寺と呼ばれる古代寺院があったとされ、ここから出土する瓦についても、渡来系氏族と関係が指摘されている。また、付近には上岡部廃寺（屋中寺廃寺）も存在する。

古墳時代から奈良時代にかけて、荒神山から南側にかけては、湖上交通の重要な拠点であったことを示す遺跡が点在している。

普光寺廃寺の塔心礎

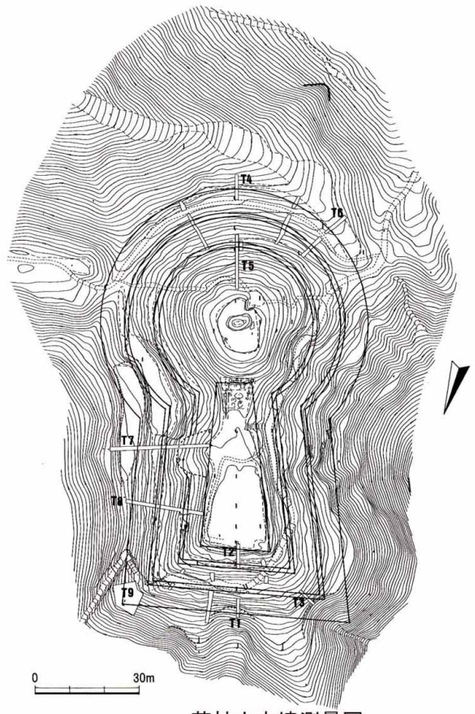


[アクセス]

● 荒神山古墳：荒神山古墳へは自家用車が便利。山頂の荒神山神社まで登ることができ、駐車場もある。ただし、ハイカーや徒歩での参拝者も多く、細い山道であることから、運転には細心の注意が必要。ＪＲ利用の場合は、琵琶湖線河瀬駅下車徒歩約１時間。

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
（関連文献／関連施設）

●彦根市教育委員会編『荒神山古墳』2010年



荒神山古墳測量図

曽根沼からみた荒神山古墳

前方部から後円部をみる

荒神山古墳

所在地　彦根市日夏町ほか

前方後円墳とは

前方後円墳は、三つの特徴を持っている。第一の特徴は「規格性」である。前方後円墳と言う特徴的な形態は、相似形墳の存在が示すように、前方後円墳は強い規格性を有している。これは、外見的な規格性のみならず、埋葬施設や方法、副装品の品目、配置方法などの内部にまで貫かれている。すなわち、前方後円墳とは同じ葬送儀礼を行うべき墳墓なのである。

第二の特徴は「数量」である。南は宮崎県から北は山形県まで、約5,200基の前方後円墳が確認されている。この数からかも明らかなように、王権のごく限られた人物の墓制ではなく、前方後円墳とは多くの人物が、共通する葬送儀礼を行うことに意味があったのだ。

第三の特徴は、「圧倒的な較差」である。最大の前方後円墳は、大阪府堺市に所在する墳長485mの大仙（だいせん）古墳（仁徳天皇陵）である一方、20mにも満たない前方後円墳も少なくない。因みに、200mを超える前方後円墳は全国で35基、100mを超えるものは、303基となっている。副葬品においても、奈良県黒塚古墳では32面の三角縁神獣鏡が出土したが、滋賀県内では雪野山古墳の３面が最多である。

この３つの特徴から、前方後円墳の性格が明らかになる。すなわち、日本列島の多くの地域で共通する葬送儀礼を創出することによって、日本列島に形成された同盟関係を確認する。同時に、その量的な較差をもって、その同盟関係内部での地位や職能を明示する。前方後円墳が、ヤマト王権の社会構造を示すと言われる所以である。

荒神山古墳の特徴

このように整理すれば、荒神山古墳が如何に優れた王墓であるかは明らかだ。特に、４世紀後半に限れば、大王墓と目される古墳も墳長は200mを少し超える程度で、墳長124mの荒神山古墳は、兵庫県五色塚（ごしきづか）古墳や京都府網野銚子山（あみのちょうしやま）古墳などの200m弱の巨大前方後円墳、岡山県金蔵山（かなくらやま）古墳や岐阜県昼飯大塚（ひるいおおつか）古墳などの150m級の大型古墳に次ぐ格式となる。

検出された円筒埴輪列

検出された葺石と円筒埴輪列

近隣の延寿寺に伝わっていた車輪石（現　彦根市教育委員会蔵）

琵琶湖周辺の前方後円墳

さて、４世紀中頃まで、滋賀県下においても幾つかの前方後円墳が築造されている。湖東地域の雪野山古墳や大津市の和邇大塚山（わにおおつかやま）古墳である。しかし、それらは70m級の規模で、さらに、段築、埴輪、葺石を完備するものは知られていない。また、円墳や前方後方墳など、格式が落ちる古墳を営むものも多く存在する。４世紀後半になって、安土瓢箪山古墳、膳所茶臼山古墳、荒神山古墳の３基の古墳が築造される背景には、大きな飛躍が存在したのである。

この飛躍は、当時の琵琶湖周辺の王たちの独自の努力によるものではなかった。ヤマト王権がその体制整備に向けて、畿内から各地へ通じる交通路の整備と掌握を推進していたことに関連する減少と考えられている。

言うまでもなく、琵琶湖は畿内から東海地域や北陸地域を結びつける重要な交通路である。その目的のために、ヤマト王権は、「琵琶湖の王」とで言うべき地位を設定し、３代にわたり、その王を任命した。その結果が、荒神山古墳などの３基の大型古墳の築造なのである。

荒神山古墳の被葬者は、その３代目の王である。彼は、琵琶湖上の交通を掌握し、畿内と東日本との円滑な交通の運営を担ったのである。